

2006年7月26日

中銀カプセルタワー管理組合  
理事長 山下 清兵衛 殿  
中銀マンション株式会社  
取締役社長 平岡 繁行 殿

社団法人日本建築学会  
会長 村上 周三

### 中銀カプセルタワー保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、貴下におかれましては、中銀カプセルタワーの建て替えを検討されている由、うかがっております。

ご承知のように、中銀カプセルタワーは、現代日本を代表する建築家の一人、黒川紀章氏の設計、大成建設の施工で1972年に竣工した1970年代の日本の建築を代表する建物であり、国際的にも高い評価を受けてきた建物であります。また、それは日本で生まれた建築理論で国際的な評価を受け、広く世界に影響を与えた事実上初めての存在であるメタボリズムを代表する重要な作品として、世界の戦後建築史には欠かせないものとなっております。

メタボリズムは、有機体としての生物が新陳代謝しながら成長していくように建築・都市も建設されるべきであるという理論であり、現在においてはサステナビリティという持続可能なシステムにつながるものとも考えられます。量産可能なユニットを一つの個室カプセルとして工場で作成し、エレベーターや階段などを含むコア（中心）となる二本の塔に、ボルトで取り付けるという当時としては画期的な工法が取られました。また、個室カプセルの配管は、二本のコア外部に露出設置された設備配管と接続されるようになっております。このように中銀カプセルタワーは、戦後日本社会における革新的な試みの代表的な存在であることが歴史的にも認められております。

現実的には、アスベスト問題という建築界全体で取り組むべき重要な課題があり、生命に関わる問題であるだけに、慎重な対応が必要であることは言うまでもありません。しかし、近代建築を持続させる動きが世界的な流れとなる中で、安全に留意した改修検討を踏まえ、メタボリズム理論に基づいたカプセル部分の取替え、機能更新とアスベスト問題の解決を行えば、記憶を継承しながら、近代建築を持続させる非常にいい事例となると考えられます。

以上のことから、貴下におかれましては、中銀カプセルタワーの文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解をいただき、是非存続に向けご検討くださるようお願い申し上げます。なお、本会はこの建物の保存に関して、できうる限り協力させていただきます所存であることを申し添えます。

敬具

2006年7月26日

社団法人日本建築学会  
建築歴史・意匠委員会  
委員長 吉田 鋼市

## 中銀カプセルタワーに関する見解

中銀カプセルタワーは、以下の点で重要な建築と考えられます。

- 1) メタボリズム（新陳代謝）理論に依拠した建築工法、設備を実現し、当時の建築・都市のありかたにおける革新性をもった建築である。

メタボリズムは、1960年東京で開かれたデザイン国際会議において、建築、建築評論、都市計画、工業デザイン、美術の分野に属する若い世代が、社会改革をデザイン・生産において進めるために提案した理論で、日本から発信されて世界から評価された事実上はじめての建築理論として、建築史的に見ても重要なものです。有機体としての生物が新陳代謝しながら成長していくように建築・都市も建設されるべきであるという理論は、現在においてはサステナビリティという持続可能なシステムにつながるものだと考えられます。理論の実現化には10年後に開かれた大阪万博のパビリオンでの実用を経て、それまでの現場で鉄骨をくみ上げあるいはコンクリートを打設して建築をつくりあげる方法から変わり、量産可能なユニットを一つの個室カプセルとして工場で作成し、エレベーターや階段などを含むコア（中心）となる二本の塔に、ボルトで取り付けるといった画期的な工法が取られました。また、個室カプセルの配管は、二本のコア外部に露出設置された設備配管と接続されるようになっており、設計者によると、もし、同様のコアが他の都市に作られた場合、カプセルごと移動し、付替えられることが想定してあったようです。ここには建築＝不動産という概念が取り払われており、現代のネットワーク社会に通じるシステムが提案されております。このカプセル建築というアイデアは、メタボリズム理論に先駆けて、1950年代中ごろから設計者が取り組んだことでもあり、当時建設においてプレファブリケーションやパネル工法が盛んに行われていたソ連などヨーロッパの諸国を訪問し、著作を残すほど研究を重ねております。このように中銀カプセルタワーは、戦後日本社会における革新的な試みの代表的な存在であることが歴史的にも認められております。

- 2) 現代日本を代表する建築家の一人、黒川紀章氏の初期の代表作であり、国際的な評価を受けている。

東京大学大学院で、丹下健三の指導を仰いだ黒川紀章氏は、早くからその才能を開花させ、特に国際的な会合や建築家の集まりに積極的に参加し、自らの建築に対する考え方を明らかにしてきました。1980年代からその作品展覧会が欧米各地で何度か開催され

ており、その活動に対して国際的な評価を受けている数少ない日本の建築家の一人です。中銀カプセルタワーは、その黒川氏による初期の代表作であり、同じように 60 年代に活動したイギリスやイタリアの建築家グループに、メタボリズムの理論を使った黒川氏の活動は影響を与えていることは知られております。その証左として中銀カプセルタワーに関して保存を要望する声は、その革新的価値を認めているイギリスをはじめ諸外国からいち早く行われております。

3) 銀座および新橋の景観を構成する重要な建物であり、近代建築を持続させるよき事例となりうると考えられる。

変貌が激しい汐留、新橋、銀座地区において、首都高速越しに見える中銀カプセルタワーは、33 年にわたって、東京のダイナミックな景観の形成に大きく寄与してきました。それは、東京をはじめ日本が最も発展し、未来を築こうとする希望に満ちていた時代の証人と見なされる建築でもあります。



(撮影：兼松紘一郎氏)